

文部科学省

私立大学戦略的
研究基盤形成支援事業

研究プロジェクト

題目

「新しい映像環境をめぐる映像生態学研究の 基盤形成」

(平成 23 年度～27 年度)

2013 年度(平成 25 年度) 研究成果報告書

立教大学現代心理学部附属 心理芸術人文学研究所

映像生態学プロジェクト 2013 年度 (平成 25) 年度 研究成果報告書

目次

チーム 1 : 新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価	
研究進捗状況報告書	1
I) 4K 超高精細映像の制作手法の開発	佐藤一彦 2
II) 超高精細映像とハイビジョン映像から生じる感性的印象の比較	池田華子 8
III) 映画館と自宅を模擬した環境における 3D 映画鑑賞の臨場感と生体負荷の測定	芳賀 繁 29
IV) 2D と 3D 視聴による疲労の探索的研究	小口浩司 44
チーム 2 : 新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価	
研究進捗状況報告書	57
チーム 2 : 1) 雑誌論文 : 中内麻美・大石幸二	
「幼児の身体の動きへの支援が身体像の描出および行動表出に及ぼす効果」	
(臨床発達心理実践研究, 第 8 巻, 2013 年 8 月, pp.44-52)	
2) 雑誌論文 : 大石幸二	
「動きを表す描画に向けられる臨床心理士の視線—身体運動図式の読み取り	
と関連する視知覚の分析—」 (人間関係学研究, 第 19 巻 1 号, pp.1-9)	
チーム 3 : 新しい映像環境における映画芸術の変容に関する研究	
研究進捗状況報告書	76
チーム 4 : 新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究	
研究進捗状況報告書	77
研究チーム 4 : 2013 年度 研究活動・研究成果報告	78
研究メンバーの関連業績一覧	84
2013 年度研究メンバーリスト	89

平成23年～平成27年 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

映像生態学プロジェクト 公開講演会

— 2013年度研究活動発表 —

主催：現代心理学部附属心理芸術人文学研究所・共催：現代心理学部

日時：2014年5月6日(火) 16:40-20:30
 場所：立教新座キャンパス, 6号館 3F N636教室(ロフト2)
 対象：学生, 教職員及び一般 (無料)

プログラム

【第一部】16:40-18:10

挨拶
 芳賀 繁
 (心理芸術人文学研究所所長)

各チーム研究成果発表

1. 研究チーム1B 佐藤 一彦
2. 研究チーム1A 池田 華子
3. 研究チーム 2 大石 幸二
4. 研究チーム 3 中村 秀之
5. 研究チーム 4 宇野 邦一・松田 正隆

質疑応答／議論

【第二部】18:30-20:30

研究チーム3A

篠崎誠監督作品上映会

『SHARING』

(2014年作品、上映時間 100分)

開催にあたって

人間およびそれを取り巻く映像環境に対し、密接に関わる研究分野 — 実験心理学, 臨床心理学, 産業組織心理学, 精神医学, 人間工学, 映画学, 映像情報メディア学, 身体哲学, 映像・映画制作, 舞台芸術表現において, 本学現代心理学部が特化している専門領域から4つのチームを編成し, 各チームの専門性を活かした効率的かつ多角的な検討を行うプロジェクト「新しい映像環境をめぐる映像生態学研究の基盤形成」。

この研究プロジェクトにおける研究チーム1～4のすべてが参加する公開講演会を開催し, 研究3年目までに得られた知見を発表するとともに, 「映像生態学」の有効性と限界, これまでの研究に不足している部分, 発展可能性などについて議論します。

研究代表者 芳賀 繁

* なお, この公開講演会は, 「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」における「映像生態学的研究」プロジェクトの一環として行うものである。

映画情報は「裏面」を参照してください。

お問い合わせ先: 現代心理学部事務室 ☎ 048-471-7149



篠崎誠監督作品

『SHARING』

ストーリー

2011年3月11日。東北を巨大地震が襲ってから3年。心理学科准教授の川島瑛子(山田キヌヲ)は、「311」に関するある調査を行っている。一方、同じ大学の演劇学科に通う水谷薫(樋井明日香)は、卒業公演として「311」をテーマした芝居の稽古に余念がない。交わるはずのない2人だったが…。

上映時間 100分(30P) カラー HD 16:9 ステレオ 使用カメラ CANON 5D

キャスト

山田キヌヲ、樋井明日香、高橋隆大、木村知貴、河村竜也、兵藤公美、鈴木卓爾、小林優斗、鈴木一希、木口健太、三坂知絵子、清水葉月、吉岡沙良、高橋 琉辰、井手正和、松下仁美、矢崎初音、内藤瑛亮、佐野真規、森田亜紀、山田達也、湯舟すぴか他

スタッフ

監督・脚本・編集 篠崎誠、脚本・監督補 酒井善三、プロデューサー 市山尚三、ライン・プロデューサー 大工原正樹
 撮影 秋山由樹、音響 百々保之、音楽 長瀨寛幸、編集 和泉陽光、助監督・美術 宮崎圭祐、衣装・メイキング 中嶋美紀
 キャスティング協力 東平七奈、ヘアメイク 大河内ともみ、応援ヘアメイク 丸山英里、応援録音 平井正吾、大野裕之
 録音助手 國方啓祐、撮影助手 三重野広帆、舞台照明 松尾元、スチール 新谷尚之 美術協力 櫻井沙由理 特撮 田口清隆
 制作スタッフ 壺井濯、一光真由美、蓮沼航、岩崎晶子、天野小夜子、古橋麻里奈
 製作プロダクション オフィス北野

取材協力 松永美希、小口孝司、井手正和、池田華子、法理樹里、香山リカ

協力 芳賀繁、堀耕治、林もも子、日高聡太、中村秀之、宇野邦一、佐藤一彦、松田正隆、伊藤由巳、佐藤歩、水上ゆき、大西恵、村田暁彦、三宅隆太、小川志津子、納富廉邦、市川真吾、四方智子、富永圭祐

撮影協力 駒沢ひろの亭、渥美喜子、万田邦敏 *特別協力* 立教大学現代心理学部

©篠崎誠、COMTEG 2014

Laura U Marks

Christine Greiner

Peter Pál Pelbart

Brian Massumi

Giorgio Passerone

Takao Egawa

Rika Kayama

Hideaki Tazaki

Kuniichi Uno

Min Tanaka

Nobuhiro Suwa

立教大学 国際シンポジウム

知覚のプラトール

映像生態学の構築をめざして

ローラ・U=マークス

クリスチーネ・グライナー

ペーター=パル・ペルバール

ブライアン・マスミ

ジョルジョ・パセローネ

江川隆男

香山リカ

田崎英明

宇野邦一

田中泯

諏訪敦彦

〈第1回シンポジウム〉

2013年12月14日[土]、15日[日]／新座キャンパス 6号館 N623教室(ロフト1)

〈第2回シンポジウム〉

2013年12月27日[金]、28日[土]／新座キャンパス 6号館 N636教室(ロフト2)

知覚のプラトール

映像生態学の構築をめざして

第1回:12月14日(土)、15日(日) 13:00~19:00/新座キャンパス 6号館 N623教室(ロフト1)

第2回:12月27日(金)、28日(土) 13:00~19:00/新座キャンパス 6号館 N636教室(ロフト2)

新しい技術によるメディア、映像が人間をとりまく環境の重要なファクターになっている現代において、身体、知覚に何が起きているか、身体と生のイメージがどのように変容しているか探求することは、人文諸学のみならず、芸術表現にとっても大きな課題である。このシンポジウムではこの課題にとって大きな問題提起を行なったドゥルーズ＝ガタリの身体論、映像論を核として、〈映像生態学〉的研究の新たな方向を模索しようとする。

いたるところで知覚の戦争といったものが繰り返されている。知覚の領界を拡大し、新しく編成する様々な技術や装置が発達する一方で、知覚における「マイナーへの生成変化」があり、これは視覚に触覚を注入し、あらゆる種類の知覚しがたい身体と、身体の新しいタイプの結合・分離を生み出している。これに呼応して、様々なタイプの生命性や身体性が見え隠れする。また芸術、メディア、テクノロジー、政治など異なる次元のいたるところに、「器官なき身体」の例さえも生み出されているのである。

ドゥルーズおよびガタリの著書『千のプラトール』そして『時間イメージ』はこのような問題をめぐる新たな実践や思索にとって、すでに多くの豊かな発想と概念をもたらしてきた。このシンポジウムは、ブラジル、カナダ、イタリア、日本から参加する研究者やアーティストが、あらためてこれに遭遇し、実験する機会である。

第1回シンポジウム・プログラム

- 12月14日(土) _____
- 13:00-13:40 問題提起/宇野邦一
- 13:40-16:40 映像上映+Laura U Marks「知覚と平滑空間、映画とイスラム芸術の出会い」
- 16:40-19:00 Christine Greiner「芸術におけるディアスポラー—日本と西洋のあいだ」

12月15日(日) _____

- 13:00-14:00 田中浜(舞踊家)/ダンスパフォーマンス
- 14:15-15:15 Peter Pál Pelbart「生政治学とニヒリズム」
- 15:15-16:15 田崎英明
- 16:30-19:00 全体討議

第2回シンポジウム・プログラム

- 12月27日(金) _____
- 13:00-15:15 Peter Pál Pelbart「フェルナン・ドリニーの方法」
- 15:15-16:15 香山リカ
- 16:15-18:15 Brian Massumi「潜在性と対面すること」
- 18:30- 諏訪敦彦/「黒髪」「ビデオシナリオ ヒロシマ/私の愛する人…」上映

12月28日(土) _____

- 13:00-13:30 ストロープ監督作品『おお至高の光』と『ジャッカルとアラブ人』上映
- 13:30-15:30 Giogio Passerone「ダンテ、ストロープ、ドゥルーズ」
- 15:45-16:45 諏訪敦彦/講演「ヒロシマ、身体、イメージ」
- 16:45-17:45 江川隆男「哲学的分裂症の倫理」
- 18:00-19:00 全体討議

主催：立教大学心理芸術人文学研究所 共催：同現代心理学部 入場無料・予約不要・通訳あり
担当者：宇野邦一（総合司会、現代心理学部 映像身体学科教授）

問合せ先：現代心理学部事務室（048-471-7149）、心理芸術人文学研究所（048-471-7251）

この催しは文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業研究プロジェクト「新しい映像環境をめぐる映像生態学研究的基盤形成」(平成23-27年)の一環として行われます。

【講師プロフィール】

ローラ・U＝マークス (Laura U Marks)

カナダ, Simon Fraser University/ Visual Culture and Performance Studies教授、Touch (University of Minnesota Press), The skin of film (Duke University Press), Enfoldment and Infinity: An Islamic Genealogy of New Media Art (MIT Press)などの著書があり、映像表現を触覚的次元という面から探求しながら、近年はその成果をイスラム哲学と結びつけている。

クリスチーネ・グライナー (Christine Greiner)

ブラジル、サンパウロカトリック大学記号学教授。身体論や身体表現を主な研究領域にしており、『舞踏——進化の一つの思想』(1998)、『能と西洋』(2000)、『身体——学際的研究への示唆』(2005)などの著作をポルトガル語で出版している。

ペーター＝バル＝ベルバル (Peter Pál Pelbart)

1956年生まれ。ブラジル、サンパウロカトリック大学教授。ドゥルーズとガタリの思想を研究しブラジルに導入する一方、統合失調症等セラピストでもあり、患者との演劇活動を続けてきた。狂気、時間、生政治学、ニヒリズムなどを主題としたポルトガル語の著作が多数ある。本年12月に立教大学招聘研究員として滞在の予定。

ブライアン・マスマミ (Brian Massumi)

1956年生まれ。カナダ、モントリオール大学教授、社会理論家、作家、哲学者。ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリ共著『千のプラトール』の英訳者である。主な著作にA User's Guide to Capitalism and Schizophrenia: Deviations from Deleuze and Guattari (MIT Press, 1992)、Parables for the virtual (Duke University Press, 2002)、Semblance and Event: Activist Philosophy and the Occurrent Arts (MIT Press, 2011)がある。

ジョルジョ・パセローネ (Giorgio Passerone)

フランス、リール第3大学教授。イタリア文学、現代思想、映画を研究する。『ダンテ、生の地図学』、『バソリーニの移動』(René Schérerとの共著)などの著書があるほか、映画監督ジャン＝マリー＝ストロープの作品制作にも参加し、俳優として出演している。

江川隆男(えがわたかお)

哲学者、首都大学東京都市教養学部助教。著作に『存在と差異—ドゥルーズの超越論的経験論』、『死の哲学』、『超人の論理』などがある。

香山リカ(かやまりか)

立教大学現代心理学部教授、精神科医。「多重化するリアル—心と社会の複雑論」、『絆ストレス「つながりたい」という病』、『独裁入門』など多数の著書がある。

田崎英明(たざきひであき)

立教大学現代心理学部教授。著書に『ジェンダー/セクシュアリティ』、『無能な者たちの共同体』などがある。

宇野邦一(うのくにいち)

立教大学現代心理学部教授。著書に『ドゥルーズ 群れと結晶』、『アルトール 思考と身体』などがある。

【特別ゲスト】

田中浜(たなかみん)

舞踊家、独自の即興ソングスを世界各地で繰り返してきた。「たそがれ清兵衛」(山田洋次監督)など、映画・テレビでの出演も多い。近著に『意身伝心』(共著)がある。フェリックス・ガタリの参与するラボルド精神病院でダンスするなど、共同作業を行なったこともある。

諏訪敦彦(すわのぶひろ)

映画監督、主な監督作品に『2/デューオ』、『M/OTHER』、『H story』、『不完全なふたり』、『バリ、ジュテーム』、『ユキとニナ』がある。

荒木優光 | 音響上演 |

「横断の調べ：福島海岸へ釣りに行った男」(音響)

「パブリックアドレス／Public Address」(音響)

7.13[土] 18:00 - (開場は30分前) | 入場無料

立教大学新座キャンパス6号館ロフト1

※上演後、荒木優光と松田正隆によるアフタートークを予定

「横断の調べ：福島海岸へ釣りに行った男」

2012 / 再演 / 約60min

2012年にマレピトの会がフェスティバルトークョーで発表した《アンティゴネーへの旅の記録とその上演》にて上演した音響作品。震災後の福島を訪れた印象と、録音した風景音を手がかりにして作成した記録音楽。録音した状況・風景の音に、言葉による視覚イメージを重ねる事により「1つの音」が持ちうる側面を導き出し、個人の印象を通したもう1つの音の連なりとして提示した。初演時は、にしすがも創造舎の校舎3階全体を使用したため観客がリスニングポイントを自由に決められる状態だったが、今回は劇場で聴く形態をとり上演する。

「パブリックアドレス／Public Address」

2013 / 新作 / 30min

現実世界を録音、拡大させる音響拡声装置、放送設備をテーマとした作品。それには現実を電気的に変換・拡大させる行為がともなう。変貌した様、変貌したイメージをあらわにする事。と同時に徹底的に面白いがる事。マイクとスピーカーのための音楽。拡声と再生の音楽。現実世界の仮象として新たにどのような音響の力を見いだす事ができるのか。

私たちは音を聞いているとき、なにが見えているのか。もちろん、音は見えない。音源は見ることができるが、音は音源の見当がつかないときでも聞こえて来る。音に形はないが、じっくり、聞き入ると、音のイメージが浮かんでくるようにも思える。

劇場で、音を聴き、音を見ること。そんなことを荒木優光は続けている。彼の作品では、音の像が現れるとき、なにかの再現がなされているようには思えない。あくまでも、そこに出現するのは様々な場所で録音され、編集された「音」そのものなのである。それゆえ、音楽に近いものを聞いている気持ちにもなるのだ。

松田正隆 [現代心理学部映像身体学科教授]

主催：立教大学心理芸術人文学研究所

Tel 048-471-7251

共催：立教大学現代心理学部

Tel 048-471-7149

*この公演は文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業研究プロジェクト「新しい映像環境をめぐる映像生態学研究の基盤形成」(平成23-27年)の一環として行われます。

「スタッフ」

舞台監督：羽鳥嘉郎

照明：松尾元

音響：齋藤学

企画：松田正隆

荒木優光 MASAMITSU ARAKI

1981年生まれ。自身の楽曲制作と共に、聴覚体験としての音のあり方を見つめ直し、リスニング環境の演出も含めた音響作品制作を行う。過去に1つのドラマテキストから新たに音響を生成し、ラジオ放送のようにパーソナリティーの音が音を導いていく音響上演作品《@アッチ&コッチ～N市からの呼び声》、震災後の福島を訪れた印象と、録音した風景音を手がかりにして作成した記録音楽《福島海岸へ釣りに行った男》、盲人が生活のための目印として聞いている音に焦点をあてた展示作品《煙にまかれたジュークボックス》がある。バンドNEW MANUKEメンバー。また、映像や舞台作品への音響・楽曲提供も行う。

| 会場 |

立教大学新座キャンパス6号館 2Fロフト1

埼玉県新座市北野1-2-26

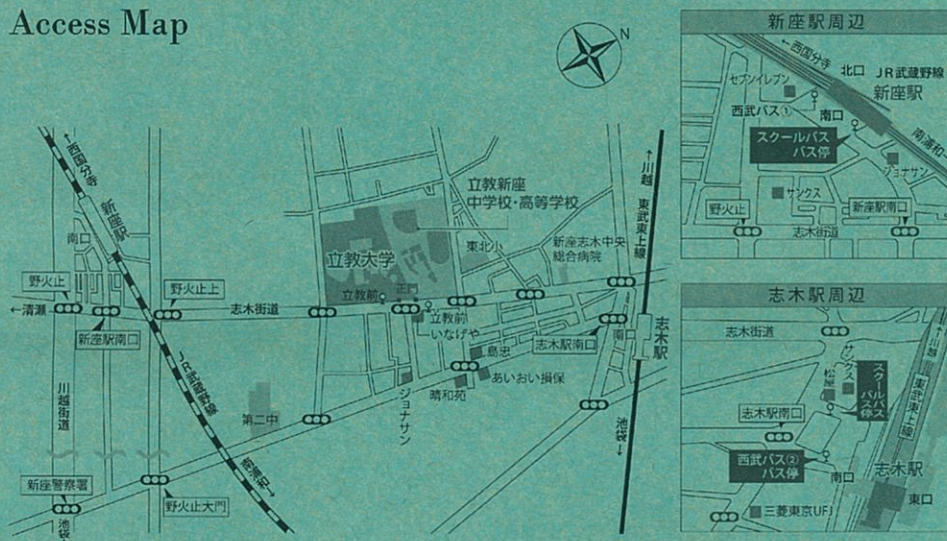
[アクセス]

- 東武東上線(地下鉄有楽町線相互乗り入れ)「志木駅」下車
 - スクールバス約7分(運行時間12:30-17:10、運賃無料)
 - 徒歩約15分
 - 南口西武バス利用(清瀬駅北口行または所沢駅東口行・「立教前」下車)約10分
- JR武蔵野線「新座駅」下車
 - スクールバス利用約10分(運行時間7:30-17:20、運賃無料)
 - 徒歩約25分
 - 南口西武バス利用(志木駅南口行き・北野入り口経由・「立教前」下車)約10分

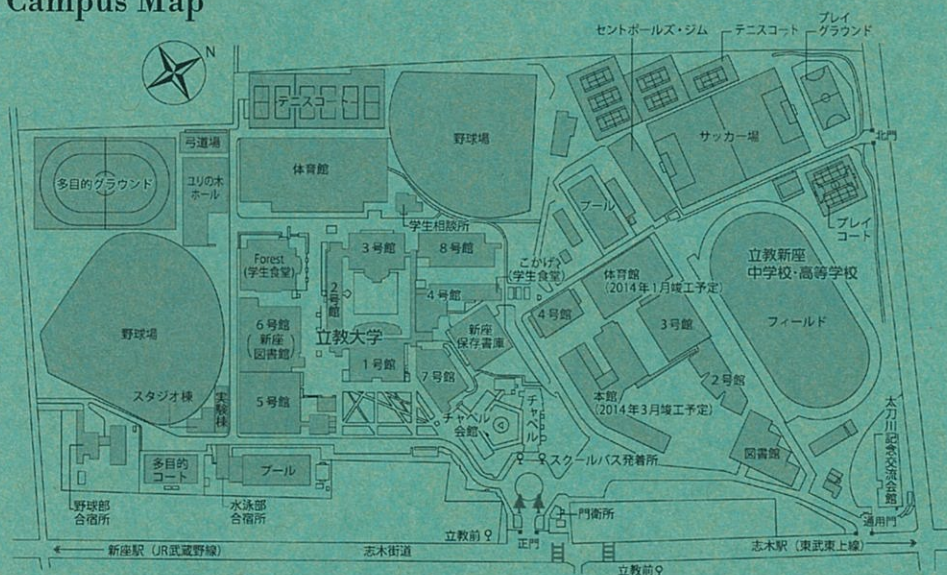
| お問い合わせ |

hatoriyo@gmail.com(羽鳥)

Access Map



Campus Map



立教大学公開講演会

資料11

講演と対話

マギー・マランと

フランス現代ダンスの冒険

彩の国さいたま芸術劇場でフランスのダンス振付家マギー・マランの近作上演“Salves”が予定されている。この機会に、フランスのダンス批評やプロダクションにおいてめざましい活動を続けてきたJean Marc Adolphe(ジャン=マルク・アドルフ)氏が、マギー・マランの創造を中心に、いまダンスの世界で何が起きているのか、現代フランスのダンサーたちの問題意識は何かを語る。

講師紹介

Jean Marc Adolphe(ジャン・マルク・アドルフ)氏：1958年生まれ。フランスの新聞「ユマニテ」のダンス・コラムを担当したあと、ダンス批評誌“Mouvement”を創刊し主宰するダンス批評家である一方、フランスの主要な劇場やフェスティバルの監督を担当し、日本を含む国外のダンスを積極的に紹介してきた。アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケル、カルロッタ・池田、ピナ・バウシュなどの現代ダンスに関する編著書を出版している。

司会

宇野邦一：現代心理学部 映像身体学科教授

日時：2013年6月11日(火) 18:15～20:15
場所：立教大学新座キャンパス6号館 N636教室(ロフト2)

通訳あり どなたでも参加できます

主催：立教大学心理芸術人文学研究所 共催：立教大学現代心理学部

お問い合わせ：心理芸術人文学研究所 TEL 048-471-7251/現代心理学部事務局 TEL 048-471-7149

*この講演会は文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の映像生態学的研究プロジェクトの一環として行います。

マギー・マラン Maguy Marin について

●プロフィール

フランスのトゥールーズに生まれる。トゥールーズのコンセルヴァトワールでバレエを学びモーリス・ベジャールの20世紀バレエ団に参加。70年代後半より自らの創作を始め、81年、代表作『メイ・ビー』を発表し世界的注目を集める。84年、カンパニー名をカンパニー・マギー・マランに改め、『バベル・バベル』『サンドリオン』『エデン』『ワーテルゾーイ』『拍手は食べられない』『ウンヴェルト』等、数々の衝撃作を発表してきた。パリ・オペラ座バレエ団、リヨン・オペラ座バレエ団、ネザーランド・ダンス・シアター等による委嘱作品も多数。その作品は各国で上演され、演劇・ダンスの両分野から高く評価されている。

マギー・マラン 《Salves》

彩の国さいたま芸術劇場にて、6月15日(土)16日(日)上演予定

主催：公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団

Salve の意味 (ロワイヤル仏和辞典による)

- 1 (礼砲・祝砲の)一斉発砲；(火器の)一斉射撃
- 2 a) [物理] バースト [電離箱で大量のイオンが瞬間的に発生する現象]；(原子炉内での)中性子の急増
- b) [情報] バースト [データブロックを一度に転送すること]

“Salves” 舞台評からの抜粋 (宇野邦一訳)

《Salves》は既製のメッセージを提供するのではない。息のつまるような美しいイメージをつくりだし詩的な手法でダンスの主題を支えている。(エコー)

マギー・マランがスキャンダルを巻き起こし、緊急性を帯びた絶望的作品を生み出したのはよいことだ。(リベラシオン)

くり返される射撃、爆発音によって舞台は21世紀のスクラップと化す。そこで人間の群れは正体不明になり、われわれの偶像は粉碎される。(ル・モンド)

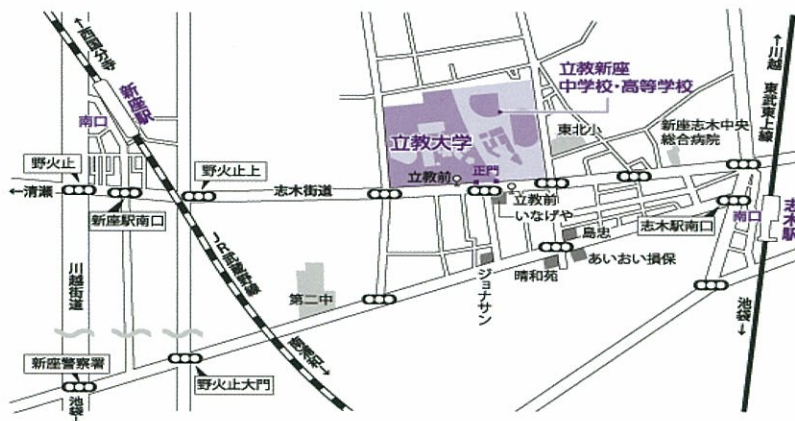
この繊細なカオスの中にある作品において、彼女は壮大なリズム構成を生み出し、現代の例外的な身体的体験をつくり出すのである。(Mouvement.net ニュースレター)

ともに存在し行動し、そこに起きることを明晰に見ようとするのを誰も邪魔することはできない。与えること、受け容れること？ ものごとを別の見方で見ることを、もう誰も阻止することはできない。(テレラマ)



会場地図

〒352-8558 埼玉県新座市北野 1-2-26



東武東上線(地下鉄有楽町線相互乗り入れ)利用/「志木駅」下車 スクールバス約7分(運行時間12:30~19:00、運賃無料)、徒歩約15分 または、南口西武バス利用(清瀬駅北口行 または 所沢駅東口行・立教前下車)約10分

JR 武蔵野線利用/「新座駅」下車 スクールバス利用約10分(運行時間7:30~20:00、運賃無料)、徒歩約25分 または、南口西武バス利用(志木駅南口行き・北野入り口経由・立教前下車)約10分

文部科学省
私立大学戦略的
研究基盤形成支援事業
研究プロジェクト

「新しい映像環境をめぐる映像生態学研究の
基盤形成」

(平成 23 年度～27 年度)

2012 年度(平成 24 年度) 研究成果報告書

立教大学現代心理学部附属 心理芸術人文学研究所

映像生態学プロジェクト 2012(平成 24)年度 研究成果報告書

目次

チーム1：新しい映像環境がもたらす心理的影響の評価	
研究進捗状況報告書	1
1) 4K、及び3D映像の撮影とその処理プロセスの実験	2
2) 室内照明環境が2D/3D映像鑑賞の臨場感および疲労に及ぼす影響	8
3) 1.異なる空間的解像度の映像観視時における主観的臨場感と眼球運動特性の検証	39
2.丁寧さとは何か：美容コンサルタントによる手渡し行動への主観的印象評価	46
3.バイオロジカルモーションの歩行方向判断におけるクラウディングの影響	50
4) 落語家の身体技法に関する映像心理学的研究	53
チーム2：新しい映像環境がもたらす映像体験の臨床的・教育的評価	
研究進捗状況報告書	62
1) 幼児の身体の動きへの支援が身体像の描出および行動表出に及ぼす効果	63
2) 自閉症児の表情認知の研究—顔図形と顔写真に対する反応の分析—	64
3) 動的学校画(KSD)に描かれた身体像と身体への気づき	65
チーム3：新しい映像環境における映画芸術の変容に関する研究	
研究進捗状況報告書	66
平成24年度研究活動と成果の報告	67
チーム4：新しい映像環境における身体とイメージの変容に関する研究	
研究進捗状況報告書	73
研究チーム4：2012年度 研究活動・研究成果報告	74
研究メンバーの関連業績一覧	78
2012年度研究メンバーリスト	89
(付録) チーム2：1) 雑誌論文「描画における臨床心理学的効果に関する展望 —描画行為に内在する身体的自己拡張感の検討—」	
チーム3：1) 雑誌論文「『裏窓』再訪—その再帰的な観客性の批判に向けて」	
2) 討議「『J・エドガー』という謎なき謎 —イーストウッドと映画の現在」	
3) 研究用資料『映画の奥行きに関する研究 注釈付文献リスト』	